

氏名	天田 顕徳
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博 甲 第 7987 号
学位授与年月日	平成 29 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	現代修験道の宗教社会学的研究—吉野・熊野を事例として—

主査	筑波大学 教授	文学博士	山中 弘
副査	筑波大学 教授	Dr.phil.	小野 基
副査	筑波大学 教授	博士（宗教学）	津城寛文
副査	國學院大學 准教授	博士(宗教学)	中山 郁

論文の要旨

本論は、修験道の中心的な霊場の一つである奈良県の吉野と和歌山県の熊野地域をフィールドとして、現代における修験道のありようと、変化の諸相を論じたものである。その構成は序論と 5 章、および結論からなっている。各々の概要は以下の通りである。序章では、修験道に関する先行研究を振り返り、これまので研究が修験道を主として歴史研究の対象として扱ってきたことを指摘するとともに、現代における修験道の変化を、「行者」と「講」という修験道の主要な「担い手」の変化を通じて論じる本論の立場を明示している。

第 1 章では、神仏分離・修験道廃止後の近代における講や行者のありように目をやり、制度的な修験道が解体を余儀なくされた一方で、修験道の担い手である講や行者が、その活動を継続していた点を確認している。筆者は、担い手の動向から近世期における修験道存続の内実を論じた場合、山岳修行を指向する行者達の宗教活動と、そうした行者を再生産する講の力が近代においても断絶していなかった点に、修験道存続の鍵が見出せる点を指摘している。続く第 2 章で、筆者は、近代初期において修験道存続の重要な鍵となった講の、その後の衰退傾向を指摘する。本章では現在の吉野では、阪堺役講に代表される巨大な講組織が勢力を維持する一方で、80 年代までに地方を中心に講の廃絶が進み、さながら「格差」の増大とも言える状況がある点が示唆されている。同時に、新聞記事を用いた統計データから、80 年代後半以降、講が「地域に埋め込まれたもの」から「客体化された文化」へと語られ方を変えている点を指摘するとともに、これまで修験道の主要な担い手であった、講員や行者の外へと修験道の存立基盤を広げようとする教団の動きを紹介している。第 3 章では、現代の大峯奥駈修行の変化を論じている。本章では、現代の奥駈修行が従来の「地縁」や「血縁」ではなく、個人参加をベースとしながらも、修行の中で育まれた共同性である「修行縁」とも呼べるものによって支えられている様子が明らかにされている。また、現代の奥駈修行では「験力」の獲得が主要な修行への参加動機となっていない点が併せて指摘されている。年齢や職業、出家の有無などの調査データをもとにした著者の議論

によれば、これは、職業宗教者でない一般人も多く参加する現代の奥駈修行において、山での修行により験力を得ることと里での宗教活動の「互酬的な連続性」が、自明ではなくなっていることに起因しているという。かつては先達の認定など、制度に組み込まれた形で存在していた奥駈修行は、現在、構造上「個人化」しており、一概に「山岳における験力の獲得」という動機が無くなったとは言い切れないものの、そうした動機が、数ある動機の一つへと後退している点が示されている。

第4章では、熊野を事例に修験道の文化財化・文化遺産化の進展について論じている。本章では、熊野比丘尼の活動を参考にした現代の観光PR活動が取り上げられ、修験者とともに熊野の信仰を喧伝した熊野比丘尼の勧進活動や、彼女達が用いた曼荼羅などが断片化やブリコラージュとも呼びうる仕方で観光の文脈へと乗せられている様子が示されている。一方で筆者は、そうした修験道や山岳信仰の観光資源化が、宗教の単なる消費にのみ止まらない点も同時に指摘している。本章では、山岳信仰や修験道にまつわる文化や伝統がツーリズムを通じて対象化されることで、「大切なもの」として再び認知され、アイデンティティ教育にも援用されるような仕方で、「形を変えて」現地に埋め込まれつつある様子を明らかにされている。

第5章では、文化財化・文化遺産化の進展と行者との関わりを、和歌山県新宮市の「お燈祭り」を事例に論じている。著者によれば、現在のお燈祭りには、病氣治しや因縁切り、加持祈祷など修験道の伝統的な宗教実践を行う地元出身の行者が関わっているという。本章では、聞き書きによる行者のライフ・ヒストリーを紐解きながら、祭の世界遺産化に伴う修験者の社会的認知の変化と、行者本人の葛藤を描くことで、自己認識としては観光化とは距離をとり、伝統的な宗教実践を行う行者が、一方では、文化財化・観光化の影響に巻き込まれざるを得ない状況が発生していることが示されている。そして、結論では、近年の修験道を取り巻く変化を、霊山や修験道の「開放化」として特徴付け、大衆登山講に対して霊山が開かれた近世期の状況と、文化財化や文化遺産化、観光化の進展した現代の霊山の様子とを比較し、現代の開放化の特質が論じられている。

審査の要旨

1 批評

本論文は、日本に固有な信仰形態であるとされる修験道の今日的な変化を、大峰山奥駈修行を中心にしたフィールド・ワークの成果に基づいて宗教社会学的視点から明らかにすると共に、修験道を観光資源として利用する熊野三山の状況とその地域で活動する一人の行者のライフ・ヒストリーを論述したものである。

以下、本論文の学問的意義と若干の問題点について記すことにしたい。まず、本論全体の大きなテーマである現代修験道の変化であるが、著者は、それを近世までの修験道を支えていた「山での修行」とその結果としての「験力と里での行使」という「山」と「里」との互酬的関係が神仏分離令によって切断されたという構造上の変化を指摘している。そして、この互酬的関係を構成するものとして、「行者」とその再生産を支える「講」組織に注目し、今日の修験道の変化の大きな理由として、先に指摘した互酬的基盤の崩壊を背景とした講組織の著しい衰退、消滅を挙げている。かかる指摘は、現代修験道の変化を考える場合の不可欠な指摘であり、本論文の重要な学問的な貢献となっている。しかも、従来の修験道研究の大半が中世期を中心とした歴史学的な視点からのものであったことを鑑みると、著者の宗教社会学的視点は新たな修験道研究を切り開くものとみることができるだろう。

いま一つ、学説史上の位置に関わるものとして、本論文の学問的貢献は今日の修験道研究を築き上げた宮家準の修験道理解の再考を促している点を挙げることができるだろう。宮家は、エリアードの宗教現象学の影響のもとに修験の構造的な理解を提示し、修験の通歴史的な普遍性を強調した。つまり、宮家は中世期の修験道研究を基盤にしながらも、それが、神仏分離による修験宗廃止という大きな変化にもかかわらず、基本

的に変化していないと主張しているのである。これに対して、著者は宮家の業績を評価するものの、上述したように、修験を支える社会構造上の変動を指摘して、その変化の側面の検討を通じて宮家の業績の弱点を鋭く論究しており、この点においても、本論文の学術的な貢献は大きいものと考えられることができる。

もちろん、本論文は近世の互酬的な関係の構造的切断と講の衰退をもって現代修験道の変化を論じているわけでない。著者は今日の修験道の変化を衰退としてだけ捉えているわけではなく、修験道を取り巻く社会構造的な変化に修験道自身が適応しているという活性化の側面にも注目しており、この点でも本論文は興味深い論点を提示している。その際に、著者が強調している動向が「開放化」であり、さらに、それを推進するツーリズムの関与ということである。この動きを介して信仰よりも世界遺産や文化財、さらにはエコロジカルな意識など、多様な目的を持った人々が山岳霊場を訪れるようになっており、修験寺院もそれらを積極的に取り込もうとしていることを明らかにしている。著者は、この動向の一つとして熊野比丘尼や参詣曼荼羅の観光資源化の状況を詳細に論じているが、それ以上に本論の重要な学術的貢献とみなされるものは、修験道の観光的対応とは別に、著者がフィールド・ワークを通じて明らかにした山岳修験の中核的修行である大峰奥駆の行の実態、とりわけ行に参加する人々の社会的属性や彼らの意識の調査であろう。これらの調査を通じて、著者は行者を再生産してきた講の衰退を確認すると共に、奥駆修行を行う人々の目的が、呪術的な験力獲得よりも、過酷な肉体的な鍛錬を通じて共有される仲間意識と行そのものへの愛着であるとしている。著者の調査によって、現在の奥駆行者たちが、伝統的な講に属する信者たちとの互酬関係よりも、個人的な問題意識から行に参加し、それぞれの個別的な問題を解決しようとする人々であることが明らかにされており、今日の修験道の変化を考える際の貴重なデータと知見を提供しているといえるのである。

次に、本論文の問題点について、いくつか指摘したい。まず、本論で使われる術語の定義の曖昧さが指摘できる。とりわけ、著者が展開する議論の重要な部分である「開放化」については、その主体や対象がわかりにくいように思われる。次に、講の状況に対する調査の不足が挙げられる。大峰山に関わる講の総数をはじめ、これらの講の動向に関するデータは二次資料が大半であり、講の衰退という本論の重要な論点を実証的に裏付ける調査がやや不足していることは惜しまれる。また、神仏分離以降の修験道の動きについて、当時の行者の活動として御嶽行者の林実利を挙げているが、彼の代表性については論究が不十分であるように思われる。最後に、観光化の動きという文脈の中で地元の行者の動向を論ずる根拠が十分に議論されておらず、この行者を取り上げる意味についてももう少し説明が必要であるように思われた。

以上、本論の若干の問題点を指摘したが、本論文が現代修験道の変化の一端として、修験道を支える構造上の変化と大峰奥駆修行の内実の変化をインテンシブなフィールド・ワークを通じて明らかにしたことは大きな学術的意義を有しており、本論文の修験道研究への学術的貢献は高く評価することができる。

2 最終試験

平成29年1月24日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。